

# 北尾政美画「隅田川榎屋図」を読む

——向島百花園再見——

鈴木 淳

要旨 文化初期の成立と目される北尾政美画「隅田川榎屋図」彩色摺り一枚は、かつて「原色 浮世絵大百科事典」第七巻に、浅野秀剛氏により、簡略に紹介され、図版も掲出されたので、その概要はすでに知られていた。しかし、それ以外、本格的に報告されたことを聞かない、極稀な珍図である。板元名を欠くが、藏版者としては、向島百花園の造園主の佐原鞠塙を想定するのが穏当である。画工は、北尾政美、号蕙齋で、絵の左上に「紹真写」とある。「紹真」の名は、政美が寛政六年、美作津山藩のお抱え絵師となつてからの名号であるが、それ以前から彼は、浮絵や狩野派の屏風絵の手法を踏まえ、スケールの大きい俯瞰的な風景版画というべきものを盛んに手掛けていた。本図もその一例に他ならない。

本図の眼目は、向島百花園の開園当時の様子を隅田川の景観を共に描いたところにある。しかも風景はもとより、人物や建物なども描写が細かく、本図を子細に観察することによって、従来、あまり注意が向けられなかった、成立当初の百花園及び隅田川の形姿について、かなり明らかにすることができるのは、たいへん貴重である。いま本図から、文化初年当時の百花園及び隅田川両岸の様子についての読み取りを、標題及び絵の上方から下方へ、即ち西岸、隅田川、東岸の順に試みてみたい。さらに本図及び一枚摺り「角田川御遊覧の伝手」を踏まえ、百花園の水茶屋としての性格について、いささか卑見を述べることにはしたい。



## 一、隅田川榎屋図の概略

平成十七年度、人間文化研究機構の連携研究「人と水」の参考資料として購入したものに、文化初年前後の成立と目される、北尾政美画「隅田川榎屋図」彩色摺り一枚がある。料紙は三八、七×五一、七種の奉書紙で、横中央と縦四つ折り分の折れ目があるが、現在はやや厚めの紙で裏打ちして、折れ目を延ばした状態である。その他のコンディションは至って良好といつてよい。

本図は、かつて「原色 浮世絵大百科事典」第七卷「作品二 清長―歌麿」<sup>(1)</sup>に、浅野秀剛氏により、

### 隅田川榎屋図

横大倍判錦絵 版元未詳 文化(一八〇四)一八一四

榎は梅の古字で、文化一年佐原鞠塙によって開かれた向島百花園を画いたもの。梅樹も数百株植えたところから、亀戸梅屋敷に対して新梅屋敷とも呼ばれた。「江戸一覽図」「日本一覽図」と出した鳥瞰図の技量をかわれた紹真が、抱一・南畝ら、百花園を愛した文人たちに依頼を受けての制作と思われる。これらは地図同様、折って袋入りで売り出されたものである。

と略述され、図版も掲出されたので、その概要はすでに知られるところであった。

また前島康彦著「向島百花園」<sup>(2)</sup>に、歙形蕪斎筆「花屋舗の図」として写真掲載するものは、まさしくこの図と同趣である。しかし、子細にみると秋の七草の短冊状の標記を欠くなどの違いがあるし、四周を省略してあるので、詳しいことは即断できない。それから現在、百花園で宣伝用の小冊子やチケットに使用する図に、本図の写しと目される



図版 1 「陽田川煤産圖」 国文学研究資料館保管



図版2 「隅田川榎屋図」落款

ものがあるが、梅を開花の状態にしたり、人影を省いたり、多少の改竄を施している。

ともあれ、本図は上記以外、本格的に報告されたことを聞かない、極稀な珍図であることは間違いない。平成十二年十一月の東京古典会の大市に出品され、『古典籍下見展観大入札目録』の図版十三頁にカラー写真で掲載されて以来、かねて追跡を心懸けてきたかきもあり、幸運にも今回、東京神田の古書肆から購入することができた。おそらく浅野氏が紹介されたものと同じの物と判断される。板元名を欠くが、鞠塙は、他にも『墨水遊覧誌』や一枚摺り等を蔵板物として出していることから推して、本図の蔵板元としても鞠塙自身を想定するのが穏当であろう。

画工は、北尾政美、号蕙齋で、絵の左上に控えめに「紹真写」とある。「紹真」の名は、政美が寛政六年五月、美作津山藩のお抱え絵師となって、狩野養川院惟信に学ぶに至って許された名号である。それ以後、政美は、新しい技法を撰取して肉筆画や画譜を中心に活躍するようになるが、それ以前の天明五年以降、彼は浮絵や狩野派の屏風絵の手法を踏まえ、スケールの大きい俯瞰的な風景版画というべきものを盛んに手掛けていた。本図もその一例に他ならない。

本図の眼目は、向島百花園の開園当時の様子を隅田川の景観を共に描いたところにある。向島百花園は、江戸後期の成立以来、今日に至るまで、まがりなりにもその風趣を保ちつつ、人々に愛好され続けてきた庭園である。将軍家、大名家の庭園を除けば、まことに類稀な存在といえよう。造園主は、佐原鞠塙で、近世の呼称の通例は菊塙であるが、自称には鞠塙とすることが多い。百花園及び鞠塙の概要については、古くは関根正直(吟風廬主人)の「鞠塙の園(附梅屋鞠塙の伝)」<sup>3)</sup>

から、近くは前島靖彦の「向島百花園」、竹之内知子の「佐原鞠場伝の再検討」<sup>(4)</sup>まで、論考が備わるので、詳細はそれらに譲るが、本稿でも必要な限りにおいて触れることになる。

絵は、隅田川兩岸の俯瞰図で、東岸の向島側のやや高い位置に視点を設定し、隅田川を挟んで西岸の橋場、今戸側方面を眺めたもの。色摺りであるが、墨の濃淡以外には、草木に淡い緑、人の着衣に空色などを使用するぐらいで、全体に渋めの色遣いである。手前の土手には桜が咲いているが、秋の七草も花開いていたり、樹木が青々と茂っていることから、屏風絵風に季節は超越していることがわかる。また本図は、浮絵の遠近透視法を駆使して、かなり正確に描かれていると判断される一方、もとより名所を集約的に見せるために、デフォルメにより誇張された面もあることはいうまでもない。

しかし、そのことは、必ずしも本図の持つ景観図としての価値を減ずるものではない。加えて、風景はもとより人物や建物なども描写が細かく、本図を子細に観察することによって、従来、あまり注意が向けられなかった、成立当初の百花園の形姿について、かなり明らかにすることができるのは、たいへん貴重である。いま本図から、文化初年の当時の百花園及び隅田川兩岸の様子についての読み取りを、標題及び絵の上方から下方へ、即ち西岸、隅田川、東岸の順に試みてみたい。さらに本図及び一枚摺り「角田川御遊覧の伝手」を踏まえ、百花園の水茶屋としての性格について、いささか卑見を述べることにしたい。

## 二、標題

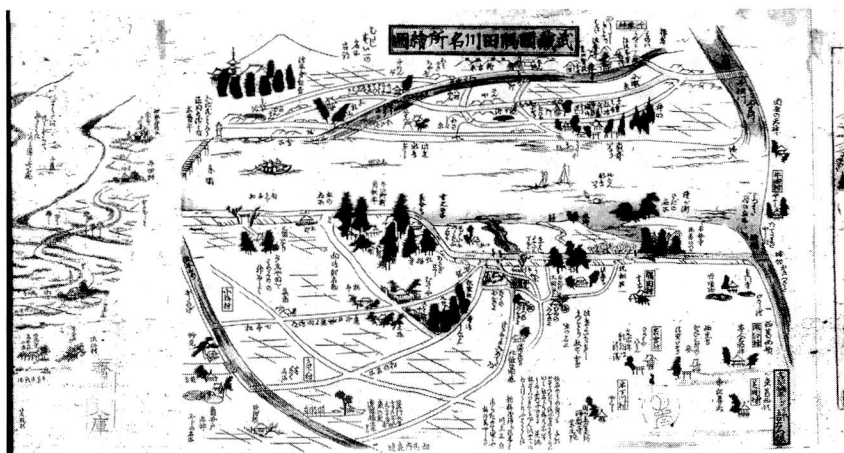
標題は、本図の右端の余白に枠取りし、大字で「隅田川榎屋図」とあり、さらにその下に、百花園の景物について、

四季花鳥、子ノ日、鶯、雉子、つくし、田つ鳴、桃、郭公、よふこ鳥、水鶏、都鳥、螢、虫、雁、紅葉、秋野と詞書きがある。よって、この庭園がもっぱら四季折々の草花と野鳥の景趣を売り物にしていたことがわかる。

画中の詞書きとしては、まず上段右から左へ「隅田川」「神明」「真崎イナリ」「渡」「吉原」「今戸ハシ」「上野」「真乳山」「浅草寺」と西岸の地名。中段の右から左へ「水神」「梅若」「木母寺」「法泉寺」「白髭」「植木屋」「牛御前」「黄(弘) 福寺」「三囲」「秋葉」と東岸墨堤の地名を記す。さらに画面右下隅に、「梅屋秋野、七草」「くつ」「おはな」「おみなへし」「ふちはかま」「萩」と秋の七草、中央に梅林の「梅」、左端に隠居屋敷の呼び名として「菊」「松」とある。いずれも描画を損なわない範囲で、必要最小限度の表記に止めている。

「隅田川榎屋」の標記について、百花園の造園主鞠場の和風雅号が梅屋(うめがや)であり、たとえば『都鳥考』<sup>(5)</sup>「角田川梅屋鞠場居士」などの自称例もあることを考えると、「隅田川榎屋」全体で鞠場自身をいったものとも考えられないこともない。しかし、梅屋が住居に基づく雅号であることを勘案すれば、やはり隅田川における百花園の意味で捉えるのが穏当であろう。つまり、鞠場は「隅田川榎屋図」において、百花園を、いわば隅田川という江戸近郊随一の名所の一部として示したことになり、百花園の宣伝を企図したには、いかにも控えめな所為のように見える。しかし、百花園が梅林を中心とした庭園とはいえず、鞠場個人の隠居屋敷としての内実も備えていたことを考えれば、むしろ錦絵の発行などずいぶん出過ぎたことであつたというべきかも知れない。ともかく鞠場には、この梅屋を、いわば隅田川という名所の中に紛れ込ませたいという意識が存したのである。それだけ、隅田川全体の景観に対する尊重の念が強かつたことであろう。もちろんこの場合の隅田川というのは、当時、隅田川として意識された流域であり、およそ浅草川の上流、千住川の下流すなわち今戸橋辺以北、綾瀬川との交流地点以南を指している。

百花園に縁のある、文化七年刊の江戸絵図「武蔵国隅田川名所絵図」にも、百花園を隅田川の名所の一つに位置づ



図版3 「武蔵国隅田川名所絵図」国立国会図書館蔵

けるといふ姿勢が窺える。本図は、名所図会を研究している斎藤智美氏ご教示の資料で、国会図書館蔵の『扶桑探勝図』(亥一九四)巻九に収められる一枚摺りの絵図である。『扶桑探勝図』は、同図書館発行の『稀本あれこれ』<sup>(6)</sup>によれば、斎藤月岑が集めた一枚摺りの張り込みで、名所、旧跡、寺社などの絵図三三八枚から成り、うち五〇枚余りは父幸孝の収集にかかり、成立は弘化二年という。当図には「月岑」の丸印が押捺される。大判二枚続き大で、薄墨は板彩、黄色は手彩。また当図の右下隅に「文化七庚午かが吉右衛門板」と刊記がある。同じ絵図が、すみだ郷土文化資料館の図録『常設展示図録』<sup>(7)</sup>にも掲載されているが、そちらには「西村源六板」とある。摺りの鮮度から両国米沢町の地本問屋加賀屋板の方が早いと推定され、おそらくは初印と思われる。西村源六は、菊塙の『群芳曆』などの売り広めの本屋としての実績もあり、後の求板であろう。

当図は、視点が真上に位置する通常の地図と異なり、むしろ「隅田川棟屋図」と同じ、俯瞰図の視点によって描かれ、道、川、橋などの他、舟、木立、寺社、旧跡、料理屋、家屋などが描出される。絵の中央を隅田川が占める構図は「隅田川棟屋図」と同じであるが、視野はもう少し広く、下は吾妻橋から上は堀切までをゆったりと収





図版4 「武蔵国隅田川名所絵図」注春亭など拡大図

める。また手前の隅田堤沿いの、三囲稲荷から梅若塚までの名所旧跡と、向こう岸の浅草寺から真崎稲荷と朝日神明までをそれぞれ点描する。地名の他、旧跡の謂われなど、様々な詞書きが記されるところが有益かつ楽しい。

その詞書き中に、実は鞠場による細工とおぼしきものが施されている。すなわち百花園（むめのみんきよ）のすぐ脇に、「此辺くいな多し、かつことり、秋の、七草」「虫の名所」と注記されるほか、その下部にことさら、「千影」「春海」「不白」の歌句を記している。「千影」とあるのは、もとより橘千蔭、「春海」は村田春海のことである。不白は江戸千家の茶匠川上不白で、諸大名家とのつながりが深い。二首の歌、不白の句ともに、後掲のように『墨水遊覧誌』にも見える。これらの和歌、発句を特記することにより、当図も表立ってのことではないが、実は百花園の宣伝を兼ねたものであることが窺われるのである。

もう一つの特徴は、向こう岸の千束村に、「緑陰茶寮」「注春亭」「朱四智荘」「茶席一賀」など、茶寮すなわち懐石料理屋などがまとめて記載されることである。また「あみがさちや屋」「八百善」や手前の「丸や」「大こくや」「むさしや」「桜本」「太郎」など、

料理屋の名前も並んでいるが、これはこの頃の絵図としてさほど珍しいことではなからう。異例であるのは千束村の茶寮の方であつて、これらと百花園とは、茶屋ということと結びついているとはいへまいか。茶寮のうち「注春亭」は、吉原周辺の随筆として知られる「閑談数刻」の作者、田川屋駐春亭に他なるまい。

この駐春亭について、月岑編『武江年表』の享和年間記事には、

山谷町八百屋善四郎が料理行はる。深川土橋平清、下谷龍泉寺町の駐春亭、文化年中より盛なり<sup>(8)</sup>

とある。平清、八百善、駐春亭といった名だたる料理屋が向島の葛西太郎（中田屋）、武蔵屋、大黒屋等と隅田川を挟んで相對し、享和から文化にかけて繁昌を競い、文人墨客の交流の場となつたことを注意しておきたい。

次に、「煤屋」の標記についてであるが、そもそもこの庭園は、梅屋、梅隠、花屋敷、新梅屋敷、春秋庵あるいは秋芳園、百花園などさまざまに呼ばれてきた。これらの呼称は、すべてそれなりのいわれがあつたようで、たとえば花屋敷は不白、百花園は抱一、春秋庵は市川米庵のそれぞれ命名になるらしい。時期が早いものは、梅屋（うめがや）、花屋敷などで、文化初年から菊塙自身が称した痕跡が認められる。とくに梅屋は、橘千蔭の『うけらが花』二編、式亭三馬の『浮世風呂』、『墨水遊覧誌』の岸本由豆腐序、小山田与清の『松屋叢話』などに広くみられるが、これは、鞠塙の和風雅号をそのまま転用したともいえよう。庭園の呼び方としては、前掲不白の句に見える花屋敷が、園門に掛けられた蜀山人の扁額も遺つており、もつとも適切と思えなくもないが、むしろ絶対的でない方はなかつたというのが、真実に近からう。ここでは便宜上、今日の呼称としてもつとも一般的な百花園を採用した。

開園の時期については、『武江年表』には享和中とあるが、享和末年遅くも文化初年と見るのが妥当な見解である。『墨水遊覧誌』<sup>(9)</sup>に、

此かつしかのさとに、梅園をひらきしあくるとし、正月園中に小松をうゑなめて、子日の宴を、催したるを

り、文人こそぞりて、つどはせたまへり、その歌に、

松も引わかなもつみてけふよりは春のこゝろをおぼえそめけり 千蔭

とあって、開園の翌年に開かれた小松曳きの宴の作として、さらに春海、自寛の歌を挙げている。また、その後の方に、先ほど触れた、不白の句を挙げ、

文化のはじめ、川上蓮花庵何がし来、和尚と池田の君を、天神堂に招請し、茶を点じす、めければ、

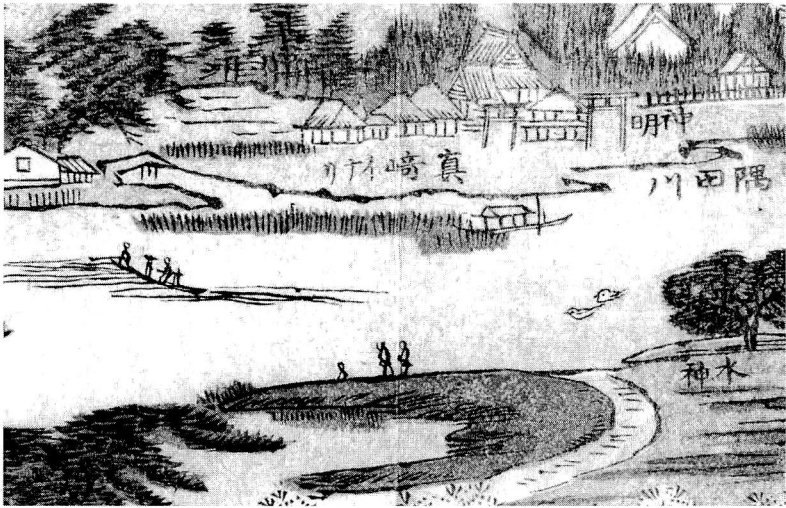
あらためて開くやうめのはなやしき

とあり、これも「あらためて」の表現からすると、開園後まもなくか、翌年のことのように思われる。いずれも開園の翌年など、後になって目立った催しをしていること、それが「文化のはじめ」とされていることなどを勘案すると、開園それ自体は際やかなものではなかつたらしく、梅の生長次第、なりゆきに任せたものであったのではあるまいか。そして、その時期は享和末年から文化初年までの間と考えて誤るまい。

### 三、西岸と隅田川

絵の上方は、左手の富士と遠近の山影から成るが、そのいちばん右は、黒髪山（二荒山、男体山）であろうか。右よりに空行く雁の群れが望まれる。西岸には、向かつて右の上流から、まず朝日神明がその神明造りの社殿とともに見え、隣には真先稻荷が並び建っている。真先稻荷は神明の摂社で、起立はつまびらかでない。平賀源内の浄瑠璃『神霊矢口渡』の第四「道行 比翼の袖」の、稻荷の名尽くしのくだりに、

王子の親玉真先がけ見めぐり笠森烏森。杉の森から三崎熊谷蕎麦切九郎助福助愛敬稻荷に西の宮<sup>(10)</sup>



図版 5 「隅田川碇屋図」隅田の渡し 拡大図

とある。関八州稲荷の司といわれた王子は別格として、語呂合わせのなりゆきとはいえ、二番目に位置するのはそれなりに高名だったからか。また、江戸人にとっては、豆腐料理の甲子屋の人氣も高かったし、宝曆、明和頃からであろう、隣接する神明と鳥居を二つ描くのは、浮世絵の常套的手法であった。

ついで、真崎稲荷の左側下流に、橋場の船着き場が突起する。さらに、船着き場に接して別荘と考えられる家屋が並んでいるが、蔵前の札差等の別荘に混じって、千蔭の石浜荘もあったこと、『墨水遊覧誌』の「芳宜園翁旧菴」によっても知られる。鶴岡蘆水画の天明元年序刊『隅田川』両岸一覽<sup>(1)</sup>をみると、いっそう事細かに様子が知られるが、川岸に面した各戸には、船着き場とおぼしき構えが確かめられる。勝手に舟を持つことは禁止されていたが、送迎用の舟の利用に供したものであろう。

中程から左側にかけて、瓦焼きの炭窯と小屋が描かれ、窯からは一筋の煙が高々と立ち上っている。この瓦焼きはいわゆる今戸焼きで、『賀茂翁家集』巻二に、

真柴たく橋場の里のうす瓦おもひくだくる世にもあるかな<sup>(12)</sup>

かはらやくけぶりのすゑのうす雲やさくらにそそぐあめとなりけん<sup>(13)</sup>

は、後に『江戸名所花暦』にも採られた。また、その様は歌川豊広の「三廻之図」その他、浮世絵にも盛んに描かれている。炭窯の後方には、屋根に天水桶を載せた吉原の妓楼、さらに背後には上野寛永寺の中堂の薨が望まれ、手前には待乳山聖天、浅草寺の五重塔、本堂、凌雲閣などの荘厳な殿堂が見える。

水面に浮かぶものとしては、渡し舟、帆掛け船、屋形舟、屋根舟、猪牙舟などの様々な舟。川中の屋形船の屋根の上に四人ほど上っているように見えるが、その四人とも船頭であろうか。西岸左寄りの今戸には船宿が並び、その脇の今戸橋は、吉原通いの入口でもあることから、辺りに舟が輻輳する様相を呈しており、今しも猪牙舟が一艘今戸橋に入って行くところである。また屋形舟などは多くは遊覧用であろうが、帆掛け船は荷船の類であろうか。隅田川図に帆掛け船が描かれるのは珍しいことではないが、描き方にやや念が入っているような気がする。

なお手前の中程の岸寄りにも、屋形舟が浮かんでいるが、これは、釣り客用か。幸田露伴の「水の東京」に、

此のあたりの堤下、上は柳畑辺より下は三囲祠前の下流数十間までの間は有名なる鯉釣場にして、所謂浅草川の紫鯉を産するところなれば、漁獲の数甚だ多からざるに聞らず釣客の綸を垂る、もの少からず<sup>(14)</sup>

とあるとおりである。ともあれ、両岸の到る処に杭が打たれ、どこでも舟を着けられたのである。

西岸の船着き場である橋場から寺島村の東岸へ渡し舟が行き来しているが、その近くの水面に二羽の都鳥が浮遊する姿が見える。都鳥を描くのは、場所も含めて、隅田川図の常套的手法であるから、ご愛敬というに止めるべきで、これをもって本図を実態から遊離したものと決めつけるには及ばない。因みに、都鳥は当時、北村季吟の『伊勢物語



図版6 「都鳥真図」鞠場著『都鳥考』所収  
国文学研究資料館蔵

拾穂抄』以来、真淵の『伊勢物語古意』に至るまで、鷗（ユリカモメ）と見る説が一般的であった。しかるに鞠鳥は、その著『都鳥考』の中で、「都鳥真図」として描画を掲げ、

都鳥いつくにも栖鳥なれと、夏秋をむねとす、土用の中に子を産水鳥なれど、暖を好む、春秋は暖き地に栖、今も夏秋は角田川にも居れり、多分ははねだの弁天、洲崎辺多く栖、鷗のよふにめにた、ず、古今集云、川の辺に遊ひけりと云によく合り

と述べ、鷗とは別種の実在種であると主張している。本図の都鳥の絵は、今日でも関東の干潟などで目にする事ができる都鳥（ミヤコドリ）を指していると思われ、それなりに学問的な確信に基づいたものであったのである。

また東岸の渡し場いわゆる平作河岸の上流寄りに「水神」と記されているが、木立の他には、鳥居はおろか祠らしきものも認められない。俗に水神の森と称される由縁である。この水神については、『江戸砂子』巻六に「木母寺の持」<sup>15)</sup>とあるが、渡し場のすぐ近くにあるので、渡し船の往来の無事を加護する神として祀られたものであろう。やはり源内の『根無草後編』巻二に、

薪水四十に至て、子なき事をうれへけるが、人の教にまかせつ、隅田川の竜神

へ、三七日の通夜をして、析出せし申子は、即後の薪水なり<sup>(16)</sup>

と、二世板東彦三郎がその申し子として描かれる竜神、すなわち当の水神に他ならない。

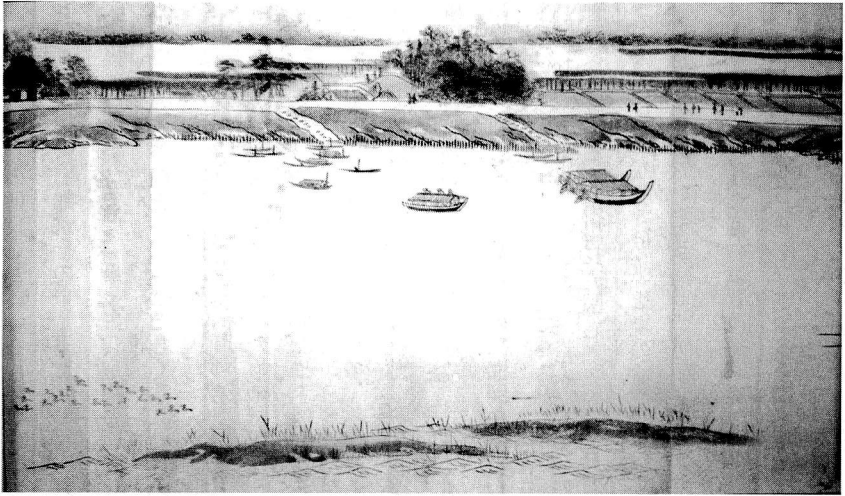
『根無草後編』では、最後に、竜神と「一体分身」とされた薪水が、前編の『根南志具佐』で水虎が瀬川路考の代わりに荻野八重桐を入水させたしくじりの責めを負わされ、大火によって命を奪われた竜神ともども死没したとする。これは明和五年四月五日の新吉原の大火の焼け跡から「火竜」という動物の頭蓋骨が出てきたという巷説と、同五年五月四日の薪水の死をこじつけたものであるが、ともあれ水神の正体が竜神と見られていたことは注意しておく必要がある<sup>(17)</sup>。また、源内が水神をことさらに大きく取り上げたのは、橋場に居住した彼ならではの扱いというべきか。

さて、本図で目立つのは、葦が多く描かれることである。すなわち西岸では真崎稻荷手前の川中、瓦窯から今戸橋にかけての川中、東岸では寺島の渡し場、中程の川岸辺りにそれぞれ葦の繁茂する様子が窺える。もちろん浮世絵で隅田川に蘆を描いた例は少なくなく、絵本でも、たとえば鳥居清長の天明五年刊『絵本物見岡』の橋場図、北尾政美の天明七年刊『絵本吾嬬鏡』の三冊図の今戸橋などを見ると、本図とほぼ同じ場所にはやはり葦が描かれていることが確かめられる。さらに、絵巻になると、鶴岡蘆水画の『隅田川』兩岸一覽<sup>(18)</sup>や、その原画といわれる大英博物館蔵、狩野休栄画の『隅田川長流図巻』三巻<sup>(18)</sup>にも、同じ辺りに蘆が生い茂っている様子がありありと描写される。とくに『隅田川長流図巻』では、「橋場の蘆原」(『遊歴雜記』) いわれるだけあって、渡し場付近にはびこる蘆は、船の往来にも支障ありやと思わせるほどの描き方である。

文章では、賀茂真淵の『賀茂翁家集』巻四「隅田川に舟を泛て月をもてあそぶ序」に、

これやこの蘆、荻を分けつるくに、やあるらん<sup>(19)</sup>

と、俗諺「難波の蘆は伊勢の浜荻」に基づいた表現がみえる。しかし、これだけではいかにも唐突な印象を受けるが、



図版7 鶴岡蘆水画『(隅田川) 兩岸一覽』葦原図 (向こう三田稲荷)  
国文学研究資料館保管

千蔭の『うけらが花』巻七「角太河にふねをうかぶといふを題にて」に、

あし荻しげれるすみだ河原も、百舟きほふ川ととなり  
てゆ、今いく世にかもなりぬらん<sup>(20)</sup>

と、はつきり隅田川に蘆や荻が繁茂していたことが明記されることよって、はじめて事態は歴然とする。南畝の『四方のあか』巻下<sup>(21)</sup>に「牛島のつのぐむあし」(向島賦)、「芦のはの、筏にいり酒の洗い鯉をもり」(同)とあるのも川縁の蘆で、川魚料理屋の葛西太郎は、その蘆で筏を作つて鯉を盛り、客を喜ばせたという。かつて隅田川は、広汎に蘆の生い茂れる川であったのである。加えて、『うけらが花』巻七「隅田川のほとりなる石浜の庵にて雨の中に作れる文」では、

こ、かしこより、鳥の飛び行きつ、ねぐらの鷺のつばさおもげにおき出で、河の瀬の真孤におり立てば、  
みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし<sup>(22)</sup>

とあり、蘆、荻だけでなく、真孤の茂みもあって、鷺やみさごに居場所を提供していたことがわかる。





図版 8 「隅田川榎屋図」百花園 拡大図

#### 四、東岸

隅田川の手前は、まず向かって右端の木母寺、白髭神社から左端の長命寺、牛御前、黄（弘）福寺、三囲社に至る隅田川堤を行き来する様子が、先掲の詞書きとともに描かれ、その人影には女性の姿も多い。木母寺以下は、いずれ

も高名な隅田川の名所であるから、ここに贅言するには及ぶまい。土手の右下側の一体に梅屋すなわち百花園が広がる。右方に池水を引廻し、木橋を渡し、流れの曲折の沿って秋の七草や桔梗、さらに蓮、沢瀉、河骨などの水草花が咲き揃っており、木橋上には、女性二人と伴の男が描かれる。

秋の七草について、「角田川御遊覧の伝手」なる鞠塙蔵板の一枚摺りには、

秋ノ七草 芽子之花。尾花。葛花。瞿麦之花。女郎花。又藤袴。朝兒之花

とあり、『万葉集』巻八の山上憶良詠をそのままに載せている。鞠塙が著した文化九年刊

『秋七草考』<sup>(23)</sup>にも、巻頭に憶良詠を挙げ、園内には唐様書家中井董堂の当該歌を刻んだ瀟洒な碑が建っており、『墨水遊覧考』には、「秋野七草園中第一の景物なり」とある。いかに鞠塙が秋の七草に力を入れていたかが知られる。もとより、梅だけでは季節が限られてしまい、茶屋としてはやっていけないという計算があったことは間違いあるまい。ところで、本図に「梅屋秋野、七草」「くつ」「おはな」「おみなへし」「ふちはかま」「萩」と五つの花名しか挙がっていないのは、まだ撫子や朝顔が揃っていなかったためか。ただし、絵を子細に見ると、「おみなへし」の右側に、桔梗らしき花が咲いているように見える。これは、敢えて推定すると、やはり「角田川御遊覧の伝手」に、

花扇七種 蓮。桔梗。小車。女郎花。菊。島薄。煎翁。以上七種祭星七草

と、七夕の七草として挙げる中に桔梗が入っていることと関係していて、実際には植えられていたものが、正式な秋の七草ではないために標記されなかったものか。花扇は、七夕の星祭りに際し、近衛家が、秋の七草を集めて内裏へ献上した花束が、末広がりの扇形であったことからいう。

もともと『秋七草考』では、『万葉集』巻一の「朝顔は朝露おひて咲くといへど夕かげにこそ咲きまさりけれ」の朝顔について、

この歌牽牛花の夕に咲まるといふことあるべからず、槿花は木なり、木に草の名いふは寛平の頃よりとぞ、さればこれは桔梗を詠せしにや、碧色などの夕はえおもふへし

というごとく、桔梗説を支持している。鞠塙が朝顔即桔梗説を主張した背景には、『うけらが花』巻三、秋歌所収で、秋の七草が桔梗を含まない無念さを詠んだ千蔭の、

七くさにもれしうらみやはれやらぬきりのまがきのきちかうの花<sup>(24)</sup>

が、微妙に影響していたと思われる。なぜなら『秋七草考』の巻末に、由都留（岸本由豆流なるべし）が千蔭の歌と

鞠場の桔梗説を受けて、

秋きりとたちしうらみもいまこそははれしやいかにきちかうの花

と詠んだ一首を収めるからである。

さて、庭園に秋の七草をはじめとする草花が咲き乱れる風情を、「鞠場の園」には、

秋草も宮城野の萩、つくば萩を始めとし、諸国名所の種を移して、道の筋も自づからなる野路の状にし、萩す、  
き桔梗葛花、しどろもどろに打乱れて、生立たるも、彼文人等が好みと聞えて、うるはしき花壇よりは、中々に  
趣きあり

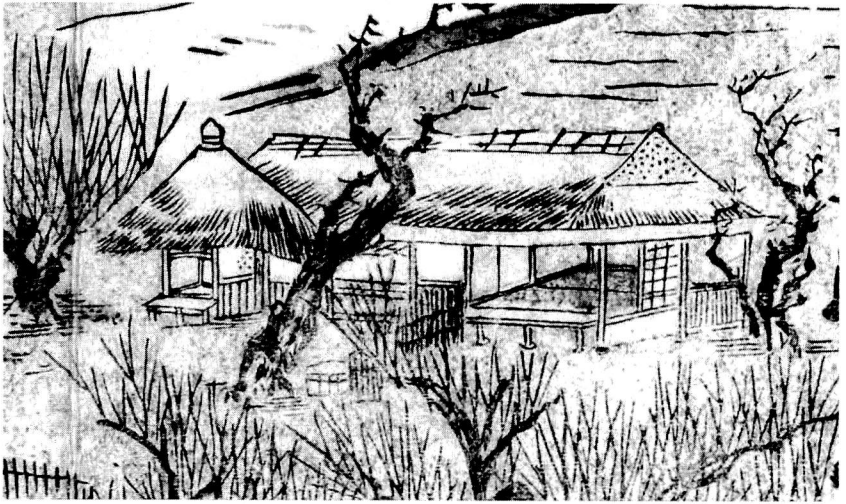
と述べ、野趣に力点を置いたものであるとする。ただし、ふつう庭園でも数寄屋周辺の露地、坪庭などに、野趣を尊重した前栽を設えることは珍らしくないので、鞠場の趣意も数寄屋造りの延長に考えれば、さほど特異なことではな  
いかも知れない。

「隅田川榎屋図」には秋の七草や水草以外、花らしいものは描かれていないが、「角田川御遊覧の伝手」には、十  
二月の花暦を載せた後に、さらに、

右の外詩経草木万葉集草木惣て園中の草木七百廿種

と記しており、この頃には、一大花園としての規模が大分整えられて来たらしい。十方庵敬順の「遊歴雜記」による  
と、「詩経」の草木を植えたのは文化六年のこと<sup>(25)</sup>なので、本絵図は少なくともそれ以前と考えてよからう。

さて、小川に臨んで、茅葺き屋根に網代戸の二軒の数寄屋があるが、一つは床の高い茶室で、部屋の中で武家らし  
き男と伴の男が手摺りから外を眺めており、掛け軸らしきものも確認できる。高貴な来客はここに通してもてなした  
もので、現在の御成座敷の謂いもここに由来するらしい。もう一つは水屋が附属するやや広めの座敷である。着流し



図版9 「隅田川榎屋図」 天天堂 拡大図

の男が煙管を手にして寛いでいる脇を、十徳を着た坊主らしき男が立て出しのお茶を運んでいる。敬順の『遊歴雜記』によれば、此菴主鞠塙、過し文化三、四年の頃は、己が娘に薄茶点させて来賓をもてなしける<sup>(26)</sup>

とあるが、本図の坊主は鞠塙その人であろう。

その左隣にさらにやや広めの家屋がある。ここがすなわち母屋で、鞠塙がふだん起居する場所であり、かつ茶屋の中心でもあったと思われる。向かって左手前に茅葺き白壁の御堂もしくは亭のような建物が隣接しており、よく見ると、いわゆる丸い宝形造りで、屋根の中央に宝珠が据えられているのがわかる。また、座敷との間を小柴垣で区切り、脇に腰掛けと、手水鉢もしくは石碑さらに井戸側のようなものがあるように見える。この御堂こそ、『墨水遊覧志』に、

文化のはじめ、川上蓮花庵何がし来、和尚と池田の君を、天天堂に招請し、茶を点じす、めければ、

あらためて開くやうめのはなやしき

とある、川上不白が「和尚と池田の君」に茶を点じ進めた場所ではなかるうか。不白は前述の通り、諸大名家とつながりが深

い茶匠で、和尚は未詳であるが、池田の君は備前岡山侯であろう。

この天神堂の前身は、おそらく「鞠場の園」に、

斯くて園中にさ、やかなる菅神の祠を建て、諸文人を促がして、各一本の梅樹を寄進せしめたり

と記された、植樹に当たつて鞠場が勧請したという菅神の祠に他なるまい。菅神は、いうまでもなく梅花をこよなく愛したとされる菅原道真を祀つたもので、人々から寄進を受けるための大義名分でもあつたらうが、いつの頃からか堂（亭）に形を整えたとみえる。不白はここで茶を点て、客に振る舞つた趣であるから、茶室としても利用されたのである。

茶室を兼ねた御堂については、田川駐春亭の「閑談数刻」巻一に、新吉原大文字屋市兵衛加保茶元成の千束別荘として、

千束別荘に藁ぶきの人丸堂あり。自在釜をさげ薄茶煎茶を用ふ。人丸の像は頓阿法師の作也

○抱一上人人丸の画に千かげの賛の碑あり<sup>(27)</sup>

と記された人丸堂の例がある。その脇に建てられたものであろうか、「閑談数刻」には抱一画、千蔭賛の碑についても言及される。天神堂も人丸堂も、外側は堂、内側は茶室という、同工異曲の造りであつたのではないか。

因みに、やはり斎藤月岑編の「扶桑探勝図」中に収められた大判三枚続き大の絵図「武蔵第一名所角田河絵図並古跡附」によれば、二つの数寄屋造りと母屋の間に四阿が建っている。本図に組み込まれた、百花園の説明文には、「詩経草木万葉集の草木園中凡七百二十種」云々とあるので、文化後半以降の刷印であり、四阿が出来たのも、文化前半ではないように思う。なお本図は、「縦山禎写」とあり、現在も百花園蔵板として知られるものと同一であるから、おそらく鞠場の入銀物であろう。図中の詩歌としては、其角の雨乞いの句の他には、千蔭の「やさかつむ」及び、

同じく千蔭の自賛歌として知られる「すみた河堤にたちて舟までは水上遠く鳴子規」を川中に書き込んである。百花園と千蔭の繋がりが、いかに深かったかを知るべきであろう。

さて、園の左方一体には梅林が広がり、園中には、低い囲いの柵が設けられた通路の中で、舞いながら扇を広げる伴の者らしき男と、手を挙げる主人らしき男がいる。柵は梅の養生のために設けられたものであるが、柵内に、佇んで憩う武士も見える。梅は、細長い杪すわえが密に勢いよく伸びており、いまだ生育途上であることを強調しているであろうか。花を付けているわけではないので、鑑賞する人々が描かれるのはいささか妙である。家屋周辺に植えられた樹木数株は、太い幹と切り詰められた枝葉の様子から、梅の老木と思われる。

梅林の通路の端には、粗末な冠木門があり、掘り囲らされた溝に小橋が掛けられ、外から梅を見やる連れの男二人は、やはり武家の主人と伴であろう。溝はもと武家屋敷の周囲に掘られたもので、溝の土橋と、その内側の冠木門とは、寺門静軒の「江戸繁盛記」に、

権籬内を屏かきふて水其の外を繞る、土橋甚だ窄せまく柴門殊に卑し、入れば則ち豁然として景寛びやうし、自から趣の別なるを覚ゆ、又一門を過て、漸く佳境に入る。<sup>(28)</sup>

とあることにより確かめられる。もつとも、この図によれば、園の外と内の間には細い溝があるぐらいで、はっきり分けられているようには見えない。後に大窪詩仏の聯や蜀山人の扁額が掛けられた園門が内側に出来るに及んで、外界との境界も整備されたということであろう。ともあれ、園内に描かれた人影は、茶事を楽しんでいる男達をはじめ、女性よりも男性中心であることが特色である。また亭主が坊主のように描かれていることから推して、おそらく茶事や詩歌等の雅事をもつぱらとし、酒色や歌舞音曲を無用とする、清潔な趣味の世界であったと思われる。

さて、梅林の左方に、菊と松の屋敷があり、土手の中程下に「植木屋」とある。松の屋敷には松が生い茂り、泉石



図版10 「松師」葛飾北斎画『東遊』所収  
国文学研究資料館蔵

に橋、灯笼が設えられている。また菊の屋敷は、周りを生け垣で囲んでおり、中に菊花壇の屋根の市松文様が見える。これら菊と松の二つの屋敷は、そもそも何であるのか。それを考える上で参考になるのが、『遊歴雑記』『墨水遊覧誌』の記述や「武蔵国隅田川名所絵図」である。『遊歴雑記』は、

殊に近年此あたりに、松樹一式を愛して植ならべ、たのしめる隠者あり、或は菊花を作り、楓樹と銃檀のみぢして燃るがごときたのしめる雅人あり<sup>(29)</sup>

と、隠者、雅人の所為として、また「武蔵国隅田川名所絵図」は、「まつのおんきよ」「きくのおんきよ」と表記し、梅屋も「むめのおんきよ」として、これらと同様に扱う。

こうした記載は、文政十一年六月序刊『墨水遊覧誌』も同様で、「松の隠居」「菊の隠居」とある。さらに、「松の隠居」

は「寺島村 二代目植木屋辰五郎」、「菊の隠居」は「同 三代目植木屋甚平」とある通り、いずれも植木屋の隠居別荘で、花木奇石による庭園の名所とされ、後者は即席料理でも客を集めたという。また百花園についても、それらと同列に、

梅の隠居 花屋敷又新梅やしきと云

とあり、百花園も隠居後の庭園業ということでは、これらと共通する生業であったことがわかる。それでも「梅の隠居」として記述するところは二丁に亘って異例に長く、本書も百花園の宣伝のために著作されたことは疑いない。因みに、右に掲げた葛飾北斎の寛政十一年刊『東遊』<sup>(30)</sup>所収の「請地松師」は、請地村という地名の一致から、さしずめ「松の隠居」に相当する二代目植木屋辰五郎を描いたと推定することが許されてよいのではなからうか。

## 五、「角田川御遊覧の伝手」と水茶屋

百花園の半紙判一枚摺りとして、「角田川御遊覧の伝手」と題するものがある。国会図書館にも、状態のよい一枚が伝わるが、今は架蔵の一枚によって紹介したい。まず、その全文を以下に掲げる。ただし、句読点その他の体裁について、私意を加えたところがある。

### 角田川御遊

#### 覧の伝手

看来東西南北客 花やしき  
植移春夏秋冬花 御茶きこしめせ 梅干もさふろふそ

正月八初子ノ日 小松引宴 人日ノ薬物ノ七くさ 芹なつな五行はこへら仏の坐す、なす、しろ是そ七くさ



二月ハ啓蟄 此日梅花盛也 凡七百株 清明 ひかんさくらやまふき

三月ハ穀雨 桜花○梨花盛也 八十八夜 牡丹花百品

四月ハ小満 芍薬百品 夏至 棟あふちせんたん○卯の花

五月ハ花かつみ○花菖蒲 小暑 合歓花ねむのはな

六月ハ大暑 あさかお花盛也○蓮○三稜むさしの、みくりト云

七月ハ白露 みやきの、萩。つくは萩。もとあらの木萩 萩類八品

花扇七種 蓮。桔梗。小車。女郎花。菊。島薄。煎翁。以上七種 祭星七草

八月ハますほのす、き。まさをの薄。ますうのす、き。かるかや。われから 惣て秋の千くさ盛也

秋ノ七草 芽子之花。尾花。葛花。瞿麦之花。女郎花。又藤袴。朝兒之花。

九月ハ霜降 さくの花盛 大きく百品 中菊百五十品

十月ハ立冬 紅葉類 楓樹。機樹。牡仲。漆。柞。銀杏。狐棧。

右の外、詩経草木万葉集草木、惣て園中の草木七百廿種

春は梅の香を茶にとふして参らせ、夏は牡丹、芍薬の色を茶の水に写し、時鳥の雨水を取、茶を煎し、呼子鳥の声に稀人をもてなし、秋は朝兒の露を百花にかもして、そかきくの匂ひ迄来客を待たよりとし、冬は紅葉のもとに尾花かるかやを櫓はたに焼そへてうつりとし、春秋の名残を思ふ風流の忍人、野さかすみかに入ます恵に依て清貧の養ふ、雪の夜は、松の葉をかき釜をたきらせ、宇治の茶を角田川の水にて点し、これを生涯の楽とす、培花余暇角田川の土を以て、都鳥、或盃、或湯呑等を製しひさく、又手製梅干もあり

あさくさくわんせ音の東、あつま橋より十二三丁、みめくりの堤伝ひ、筑波山を目あてに、むさし雪月花名

板行の時期は未詳であるが、文中に梅花「七百株」とあること、また左注に「詩経草木」とあることなどから勘案すると、おそらく文化六年以降、文政初年頃までのことではないか。題名の「伝手」は、ついでの意味で、百花園をあくまで名所隅田川巡覧の一環として位置づけていることが窺われる。また、題名の下の「看来東西南北客 植移春夏秋冬花」は、後に枝折り戸の左右の柱に掛けられた、文政十年臘月の大窪詩仏の聯に同趣であるので、これも詩仏の作であろう。その下の「御茶きこしめせ、梅干もさふるふそ」は、橘千蔭の筆意をそのまま写した、土産用の掛け行灯から取ったもの。

全体が前半の花暦と後半の和文、末尾の道程から成り、花暦は、各月の節季と諸花の開花時期を組み合わせで記述する。そのうち特筆すべきは、正月初子の日に「小松引宴」を挙げることで、七月に「花扇七種」を特記すること、八月に「秋ノ七草」を特記することなどである。小松曳きについては、『墨水遊覧誌』に開園の翌年、百花園のそれを詠んだ千蔭、春海の歌が引かれること、前述の通りである。百花園の呼び物の一つ、王朝風の遊びである「小松引宴」の起源に、千蔭、春海が関与したことは間違いない。

また、秋の七草は、菊塙が梅の植樹とともに当初から力を入れたところであった。それに対して、「花扇七種」とは、これも前述の通り、例年、七月七日の星祭に際し、近衛家から秋の七草を集めて「にほひ」と称する女使いが内裏へ献上した花束のことで、けせんともいい、室町時代以来の年中行事。『古画備考』巻三に源（西村）正邦の画並びに題により、松平定信らが歌を詠んだ記載がある。

後半の和文は、一口にいえば茶屋としての百花園の本質を露わにした内容となっている。春に梅の香りを煎じたり、

牡丹、芍薬の色を写したり、時鳥の鳴きぬらした雨水を使った御茶というのは煎茶の類であろう。一方、冬に松葉で釜をたぎらせ、宇治茶を隅田川の水で点じるのは、いうまでもなく茶の湯である。現今の隅田川の水質からいって信じがたいことであるが、当時は案外あり得たことかも知れない。<sup>(31)</sup>『遊歴雜記』五編卷下「葛飾郡隅田村水神の社地煎茶」にも、

斯る処こそ煎茶して楽まんと携えし帖昆炉に取出し、流れに任せて墨水を汲取来て急火焼<sup>キヒシヤウ</sup>の湧たつ間、松脂ざがりに烟草吸いながら、四方を景望するは心穩に値千金といふべし<sup>(32)</sup>

と、煎茶家の十方庵が隅田川の水で煎茶を楽しんだ記事が見える。

時代が下つても、鐮木清方著「隨筆集 明治の東京」<sup>(33)</sup>所収の「母」に、

同じ隅田川の水でも昔は澳の水を汲んでお茶を立てたこともあるという、世くだりぬれば水も清んでいなくなる。とある。また千蔭の『うけらが花』卷七所収「隅田川のほとりなる石浜の庵にて雨の中に作れる文」には、

みをの一すぢは、さしひく汐にもまじらで、とはに花田の色に流れいにて、沖に出づめり、これや水上の秩父の山の真清水の落ち来るならむ<sup>(34)</sup>

とあり、秩父を水源とする荒川の縹色の一筋が、潮の満ち干にも関わりなく貫流して海まで達していたという。当時の人々は、この清流を汲んで喫茶を楽しんだのである。ともかく御茶を介して、百花園がいかに隅田川と密着しながら存立していたかが、如実に知られよう。

末尾に隅田川焼きとして、都鳥、盃、湯呑みの製作を挙げるのも、茶味のしからしめたところといえる。『墨水遊覧誌』には、小梅村、今戸村の瓦師や寺島村、隅田村の焙焙、火鉢などの素焼きである隅田焼きに触れた後、

花屋敷にて乾山流の陶器を製し、売ひろむ、都鳥の香合、あるひはさかづき、あるひは茶わん、すみだ川やきと

いふ、すべて此辺の陶器は、あんかうがまにて製す

と記す。隅田川焼きが乾山の陶器の風合いにどれほど迫れたのか知るよしもないが、『浮世風呂』第四編巻中に、碗中いっぱい「梅の輪」、外側に「堀の内さまの納傘といふ字配」の銘「隅田河花屋敷器」、糸底に「百花園梅屋菊塙」とあるという茶碗がそれである<sup>(35)</sup>。ともかく、この和文は、千藤の掛け行灯の売り文句にも「御茶きこしめせ」とあるごとく、いかに百花園の本体が茶店としての性格を強く持っていたかを表現して余りあるものがある。

そもそも鞠塙は、斎藤月岑の「武江年表」の享和年間記事や正直の「鞠塙の園」が述べるところによれば、奥州の人で、天明頃江戸に出て、はじめ堺町の芝居茶屋和泉屋勘十郎に雇われ、平蔵と称し、十年ばかりのち、日本橋住吉町に移り、骨董店を開き、北野屋平八（のち平兵衛、略称北八）と改名したという。この骨董店について、『盛音集』<sup>(36)</sup>の自跋には「小人以販古書画銅器得接諸名賢玉」とあり、典型的な書画骨董店であったと思われる。しかし、『喜多村節信の「武江年表補正略」によれば、

筠庭云ふ、北平が事もと茶がらを商ひし者なり、初め大門通り横店と称する所にすみ、それより住吉町裏屋にも居たり、好事者にて書画をすき、大雅堂贗筆を多くなしたり<sup>(37)</sup>

とある。すなわち以前は、茶殻商いと、一本に茶の楽商いであったともいい、いずれにしても意味不鮮明ながら、製茶に茶器や茶掛けなどの道具も扱う店で、趣味と実益を兼ねた気楽な商売であったということであろうか。ともかく商才に長けた鞠塙は、徐々に商売を拡充して相応の富を手に入れたらしい。そして、「鞠塙の園」によれば、この頃、開いた道具市に不正の聞こえがあったため、仲間とともに過料、入牢、追放などの咎めに遭ったと推測される。

その後、鞠塙は菊屋宇兵衛と改名し、やがて向島に隠居、剃髪して、その略称菊宇を採って鞠塙と号した。隠居地は隅田川の東岸、白髭神社にほど近い向島寺島村の一郭で、もと武家屋敷の土地計二千坪を買い取ったものという。

梅園を思い立った動機は、鞠塙自身が「梅屋花品」に述べるところでは、

孤山の処士和靖は梅三百六十株を植、標実を售うて生活す、梅屋子も亦跡を逐て隅田川の辺に荒田數百畝を買て梅三百六十株を種、一株を以て一日の用とす、花の時に花を賞し、熟す時は実を売て世を渡り、其清貧を樂み、人間はんくはの事を羨あやむず、惟自得する所に逍遙せむのみ<sup>(38)</sup>

のごとくである。すなわち、鶴と梅花を人生の伴侶とした、孤高の文人林和靖の故事に倣い、文人趣味を気取つて梅樹を植え、花を賞美するとともに、その実を生活の糧に充てるなど、清貧の樂しみを旨としたのである。林和靖の故事は、画題でも有名であつたので、古物商の鞠塙にとつては、ごく親しい存在であつたろう。しかし生計には苦勞したようである。「墨水遊覽誌」に収められた大窪詩仏の詩「題鞠塙所居」には、

江畔移家得 不嫌生計貧 栽梅三百本 糊口十余人

と詠じられた。自らの意志に依ることとはいえ、十余人の家族、使用人等を食へさせていくための辛苦は相当のものであつたのである。

また梅の植樹について、「鞠塙の園」は、さらに具体的に、

斯くて園中にさ、やかなる菅神の祠を建て、諸文人を促がして、各一本の梅樹を寄進せしめたり、其文人は誰々ぞ、千蔭、春海、南畝、鵬齋、詩仏、五山、仏庵、抱一、文晁、自寛、平荷、寛光、大梅、躬弦、不白の面々、何れも栽えし栽えければ、忽に三百六十余株となりぬ

と記す。鞠塙は、梅園を造成するに当たつて、その費用を勸進し、右の歌人、文人等の寄進を受けたのである。挙げられた人々の内、平荷は戯作者名朋誠堂喜三二、狂名手柄岡持であるが、文化年間には、この隠居名で、千蔭、春海と歌詠に励んでいた。平荷を加えると、千蔭、春海、自寛、寛光、躬弦など、いわゆる江戸派歌人が多いことに注意

を払っておく必要がある。あとは錚々たる文人、画家、茶人であるが、大梅は江湖詩社の詩人で、のち道彦について俳諧を学んだ小島梅外の俳名。「栽ゑし栽ゑ」は、『古今集』秋下、業平歌の詞取りである。

とはいえ、日常生活の糧まで歌人、文人等の善意にばかり頼っているわけにはいかない。もちろん入園料として木戸銭を徴収するというような発想は当時なかったはずで、取るにしても茶店としての茶料か、お土産の梅干し、隅田川焼の類であつたと考えられる。『江戸繁昌記』に、

園主梅を以つて第一生計と為す、花を媒して茶を売り、子を養つて諸ウメギシと為す<sup>(39)</sup>  
とあるのは、千蔭の掛け行灯の文句と思ひ合わせて、偽りのないところであろう。

また、「鞠場の園」は、次のような逸話を伝える。

或時大田南畝来遊して、雅客の群集するを見つ、主人に茶料は日々いか程ぞと問ふ、北平対へて素見の客多くして、茶料とはあらずといへるに、扱ては清掃のたつきもなからん、よし／＼我に工夫あり、太やかなる竹を、中の節空らになして持てこといふ、云ふに随ひて南畝の前にさし出せば、頓て筆とり、

花を見て茶代をおかぬ不風流

これも世渡りたかい水茶屋

と書いつけ、之を四阿舎の柱に掛け置きねとて、北平にとらせつ

南畝作とされる右の狂歌は、道楽趣味のため茶屋商売するにも、取るべきものはしっかり取りなさいというものであるが、「世渡り高い水茶屋」のいい方によつても百花園の基本が水茶屋であつた事実が改めてはつきり浮かび上がつてこよう。

〔注〕

- (1) 「原色 浮世絵大百科事典」第七卷「作品一 清長—歌麿」、昭和五十五年十二月、大修館書店。
- (2) 「向島百花園」(一九八一年五月刊、一九九四年一月改訂、東京都公園協会)二七頁。
- (3) 「鞠場の園(附梅屋鞠場の伝)」、「国民之友」第九三号、明治二十三年九月。
- (4) 「佐原鞠場伝の再検討」立教大学日本文学」第六十一号、一九八八年二月。
- (5) 「都鳥考」、国文学研究資料館蔵(ヤ九・八〇)、半紙本一冊、文化十二年正月、江戸西村源六、山城屋佐兵衛板。
- (6) 「稀本あれこれ」、一九九四年五月、国立国会図書館。
- (7) 「常設展示目録」(平成十一年三月、すみだ郷土文化資料館)三七頁。
- (8) 「増訂武江年表」(東洋文庫一一八、一九六八年七月、平凡社)二八頁。
- (9) 「墨水遊覧誌」刊一冊、東京芸術大学附属図書館協本文庫蔵本、明治十九年序後印本。R二九一・一二。国文学研究資料館マイクロフィルムによる。
- (10) 日本古典文学大系五五「風来山人集」(一九六一年七月、岩波書店)三七九頁。
- (11) 国文学研究資料館保管、刊二軸。鶴岡廬水画、天明元年五月跋刊。
- (12) 「賀茂真淵全集」第二十一卷(昭和五十七年八月、続群書類従完成会)三七頁。
- (13) 文化五年十一月、江戸大和田安兵衛製本、半紙本四冊。架蔵。
- (14) 「水の東京」、「露伴全集」第二十九卷(昭和二十九年十二月、岩波書店)五〇六、七頁。
- (15) 「江戸砂子」(小池章太郎編、昭和五十一年八月、東京堂出版)三〇一頁。
- (16) 日本古典文学大系五五「風来山人集」一一一頁。
- (17) 日本古典文学大系五五「風来山人集」の校注等参照。
- (18) 「隅田川長流図巻」三巻、紙本着色。参考、小林忠「隅田川兩岸図巻」の成立と展開、「国華」一一七二号、平成五年七月。なお本巻は、「秘蔵日本美術大観2」大英博物館Ⅱ(講談社、一九九二年八月)に収められる。
- (19) 「賀茂真淵全集」第二十一巻、八九頁。
- (20) 日本名著全集江戸文芸之部「和文和歌集上」(昭和二年十一月)一九五頁。
- (21) 新日本文学大系「寝惚先生文集 狂歌才蔵集 四方のあか」(一九九三年七月、岩波書店)二九一、九二頁。

- (22) 日本名著全集江戸文芸之部「和文和歌集上」一九八頁。
- (23) 文化九年三月、須原屋善五郎板、半紙本一冊。刈谷市立刈谷図書館所蔵。国文学研究資料館紙焼き本(F七六八)による。
- (24) 日本名著全集江戸文芸之部「和文和歌集上」一二四頁。
- (25) 『遊歴雜記』三編卷之上。「江戸双書」卷之五(昭和三十九年九月、名著刊行会) 三六頁。
- (26) 同上、三七頁。
- (27) 『隨筆百花苑』(昭和五十九年二月、中央公論社) 二二六頁。
- (28) 『江戸繁昌記』(東洋文庫二九五、昭和五十一年十月、平凡社) 一〇一頁。
- (29) 『遊歴雜記初編2』(東洋文庫五〇四、一九八九年七月、平凡社) 五三頁。
- (30) 『東遊』国文学研究資料館蔵(十二・四八三)、大本一冊、寛政十一年春、葛屋重三郎刊。
- (31) 隅田川の水质について、当時、銘酒隅田川の存在、白魚、紫鯉、蜆などの漁獵や浅草海苔の養殖が行われていたことを考えると、かなり水质は良好であったのではないかと推定される。また谷口智雅氏の『河川文化』(一九九九年五月、日本河川協会)所収「文学から川の水质読めた」によると、二〇世紀に入って、生活排水のため水质の悪化が顕著に進むが、関東大震災後の一時期には、隅田川の水質も「きれいな水质」と評価できる水準に戻ったという。
- (32) 『遊歴雜記』五編卷下。「江戸双書」卷之七(昭和三十九年九月、名著刊行会) 一九一頁。
- (33) 岩波文庫『隨筆集 明治の東京』(一九八九年四月、岩波書店) 六七頁。
- (34) 日本名著全集江戸文芸之部「和文和歌集上」一九八頁。
- (35) 新日本古典文学大系八六「浮世風呂 劇場粹言幕の内 大千世界楽屋探」(一九八九年六月、岩波書店) 二五三頁。
- (36) 文化元年六月、須原屋市兵衛、須原屋孫七板。東京芸術大学附属図書館蔵、R九一九・五・一二。国文学研究資料館紙焼き写真本による。
- (37) 『増訂武江年表2』(東洋文庫一一八、一九六八年七月、平凡社) 二八頁。
- (38) 国立国会図書館所蔵、小本一冊。特一・二七三七。
- (39) 『江戸繁昌記』(東洋文庫五〇四) 一〇一頁。

なお本稿は、人間文化研究機構の連携研究「人と水」(代表、秋道智弥、平成十七年—同二十一年)における研究成果である。